

グンダグンド—エチオピア・ティグライ州秘境の修道院—

青島 啓太

エチオピアの北部、エリトリアとの国境に面して広がるのがティグライ州である。エチオピアのキリスト教文化を理解するためには、ティグライ地方における宗教史の研究や修道院、教会建築の遺構についての研究が不可欠である。世界遺産にも登録されているラリベラの岩窟教会群は有名であるが、他にも、ロッククライミングをするような険しい崖を登ってようやくたどり着く、アブナヤマタ（Abna Yamata Guh）などの岩窟教

会は、ティグライ州の中でも非常に興味深い建築遺構である。中でも、本稿で紹介するグンダグンド修道院（Gunda Gundo）（写真1）は、ティグライ州の北部の深い渓谷に位置するエチオピア正教エステファノス派に属するとされる修道院であり、ティグライ州に残る宗教的な遺構として、歩いて8時間要するその立地や、建築の構法的な特色から見ても非常に稀有な存在である。

修道院の成り立ち

グンダグンド修道院の最大の特徴は、2400mと標高の高い都市アディグラットから約1500m下った、海拔950mの深い谷底に立地することである。このアクセス困難な地理的条件により修道院の生活環境は維持され、敵の侵入から保護されてきたとされている。

修道院の起源は15世紀に遡り、中世のエチオピ

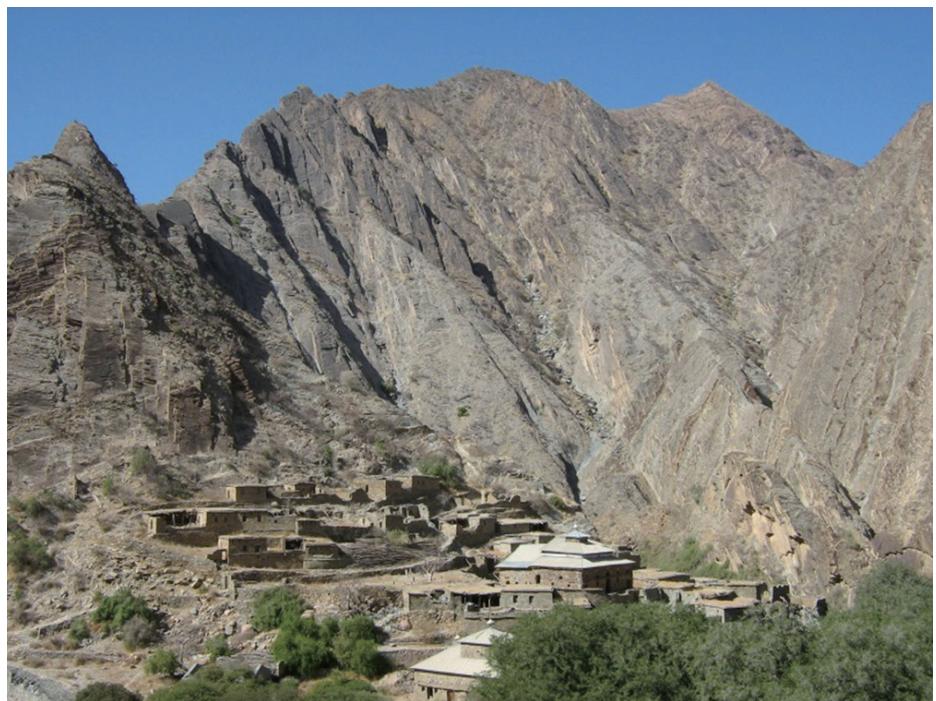


写真1 グンダグンド修道院の全景 撮影：設楽知弘

ア正教会内部における宗派の分離を理解する上で、非常に重要なものである。グンダグンド修道院は、修道僧エステファノス（1394-c. 1444）¹の命により、弟子イエスハクが創設したとされる。このエステファノスは、帝権を否定して教義をめぐって対立したためエチオピア正教会内部から異端視されていた。そのため、対抗勢力からの度重なる攻撃や破壊を受け、再建を繰り返しながら移動して最終的に急な渓谷の奥深くに築造された。15世紀の最盛期には、少なくとも200人が生活する修道院を中心とした建築群であった。しかし現在では、近年の気候変動から作物が不作となり、また度重なる洪水の被害に遭ってきたことも影響して、修道僧らの転出が加速して貴重な建築遺産の荒廃

¹ エステファノスらの活動に関しては、僧院に保管されている「グンダグンド文書」に記載され、André Caquot, Robert Beylot, Claude Lepageらによって明らかにされた。

が進んでいる。国立メケレ大学の遺産保護学科は、慶應義塾大学の三宅理一教授（当時。現在藤女子大学教授）らの協力で2007年に設立された。創立以来、ティグライ州文化観光局らと協力して、このグンダグンド修道院の歴史的位置づけと、この地方における独特の建築構法に注目した研究をしながら、その修復と保全を進めている。筆者は、2008年から1年間専任講師としてこの調査・修復活動にかかわると共に、それ以降も研究チームの一員として計画に参加している。そしていよいよ、2014年からは、3年の修復計画をもとに、具体的な修復保全プロジェクトが始まった。

グンダグンドへの道のり

ティグライ州の首都であるメケレ市から、エリトリアの国境に向かって2時間ほど車を進めると、アディグラッドという都市にたどり着く。メケレの街で手に入るパンとは、比べ物にならないほどの美味しいパンが食べられる街で、それを楽しみに向かう。その周辺で、遺産保護の大工仕事を依頼できる職人と待ち合わせ、さらに車



写真2 地元の農民からロバを借り、高低差1500mの道のりを歩いて建築資材を搬送する

撮影：清水信宏

を10分ほど走らせると、グンダグンドに向かう道の車で行ける限界の地点にたどり着く。坂道を下る直前にある小さな集落で、資材を運ぶためのロバを借り受け、最後のコーヒーを頂く。ここからは、いよいよ険しい山道を谷底に向かって下ってゆく（写真2）。

ひたすら道なき道を4時間ほど下ると、日が傾き始めたあたりでようやく崖道が終わる（写真3）。グンダグンドには乾季を選んで現地へと向かう必要があるが、ここに来てようやくその理由を理解する。グンダグンドは、谷底に流れる涸れ川の中州に建つ修道院であり、雨季には周囲から流れ込



写真3 渓谷の深い底に向かってひたすら下っていく道のり 撮影：清水信宏



写真4 グンダグンド修道院の配置 撮影：三宅理一

む水で山道が閉ざされ、山道に不慣れな我々では危険である。このため、乾季で干上がった川底を歩きながら、最短ルートで向かう必要がある。川が流れたであろう道を歩き、日が暮れるころによくやくグンダグンドの建築群にたどり着く。

グンダグンドは、2つの河川が合流する地点に位置し、石壙に囲まれた1.8haの敷地中に約30の僧房と教会が建つ(写真4)。河川に沿った約0.3haの土地は農地に利用され、オレンジやバナナ等の作物が修道院の生活を支えてきた。修道院はこの地方のエチオピア正教徒たちから特別な崇拝の対象とされてきたが、ハイレセラシエ以降のデルグ政権による土地の強制収用政策によって、修道院の経済基盤は弱体化し、それ以降の人口流出の要因となったと言われている。



写真5 修道院周囲の岩壁に見られる薄い地層が積層した岩盤 撮影：清水信宏

デブラガルゼン教会

夜が明けると、そそり立つ岩壁に囲まれたグンダグンドの絶景を見上げることができる。そして、その岩壁を眺めて気づくのが斜めに薄い地層が積層した岩盤である(写真5)。グンダグンドの建築物に使用されている薄いスレートとその特徴的な積み方は、この岩盤からとれる石材によるものである。

デブラガルゼン(Debre Garzen)教会は、東側のマクダス(聖域)と西側のケデス(礼拝堂)の2つの空間に分かれ、幅14m長さ18mの長方形の平面形状をもつ。この建築物が、保護活動の主な対象である。構造体は周辺で取れるスレート状の石材による組積造で、開口部のアーチもこのスレートのみで構成され、建築的に見ても非常に特徴的である。薄いスレートで構成された壁は波打ちや亀裂が見られ、早急の修繕を要する。装飾的な観点から見ると、同じくティグライ地方に7世紀頃まで栄えたアクスム朝にも見られる形象もいくつか確認できるが、他のエチオピア正教の建築と比べ極端に少ない。この質素な建築様式も、グンダグンドの特徴の一つと言える(写真6)。

ここで生活する修道僧たちは、デブラガルゼンの周りに建つ僧房で過ごすが、必要に応じて我々



写真6 修復活動中のデブラガルゼン 撮影：筆者

が下りてきた山道を行き来しながら、街で必要なものを調達する。修道院の一部は女性の立ち入りが禁止されていて、家畜でさえもすべて雄である。街での生活と同様にインジエラを主食とし、生活は非常に質素である。彼ら自身も、修道僧の流出や建物の荒廃には、大きな危機感を抱いているため、建物の修復には積極的に手を貸してくれる。

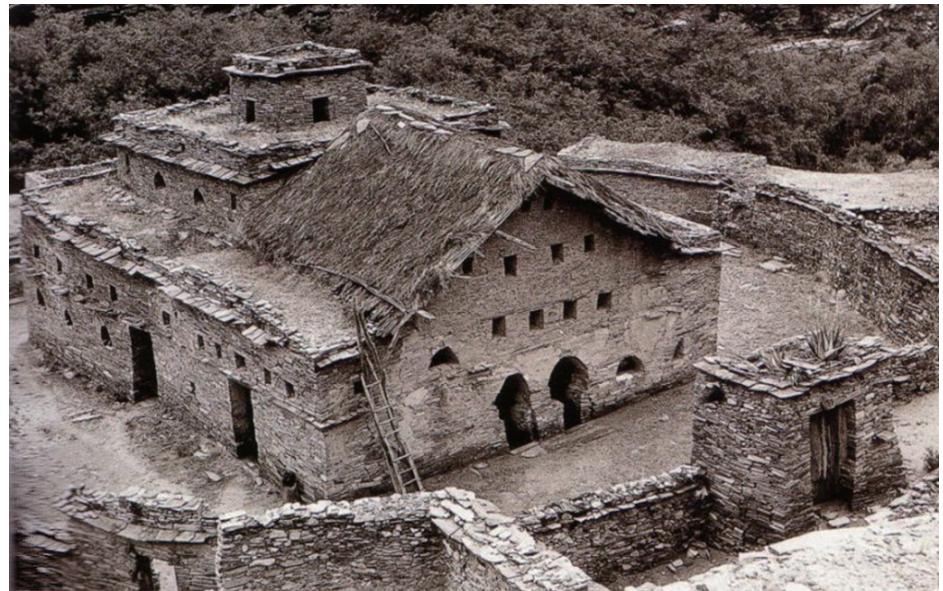


写真7 1960年代に撮影されたデブラガルゼン 撮影：不明

グンダグンドからの帰路

復路は、往路とは反対に1500mを登るため、道のりは更に厳しい。出発は、夜の9時過ぎである。これは、日差しの強いエチオピアで、日中の長時間移動が非常に危険だからである。途中、グンダグンドから少し上がったところにある数軒の民家で、アディグラットの周りでよく食べられている「トゥフロ」（トウモロコシの粉を水で溶き練り込んだ団子のことで、香辛料の利いたソースについて食べる伝統料理）とコーヒーを頂いてエネルギー補給をし、8時間の山登りに備える。

真夜中の山道を、遺産保護活動で共に現場に入った現地のメンバーらと登るが、真っ暗の山道は一切の方向がわからず、日本からのメンバーだけでは到底たどり着けなかつた。今もグンダグンドに残る修道僧らが、定期的にこの道のりを往来しながら生活をしていることは驚きである。夜が明け、朝6時頃によく出発地点と同じ場所に戻って送迎の車と合流する。

おわりに

我々の遺産修復活動は、グンダグンド修道院の中で最も重要な教会であるデブラガルゼンを1960年代に撮影された当時の姿に戻すことを大きな目的としている（写真7）。辺境の地とも言え

る場所にあるグンダグンドには、コプト教の影響を受けながらティグライで独自に展開した宗教観念と建築的な特色が色濃く残り、現代のエチオピア正教に至る系譜に繋がる重要な遺産であると言える。しかし、グローバルな気候変動も影響して修道院周辺の環境は変化し、貴重な遺構がダメージを受けている。こうした自然環境と深く関わりを持った歴史遺産にとって、地球環境の変化は非常に大きな問題である。先進国で多くのエネルギーを使用しながら生活する我々には、アフリカの建築遺産を保護し伝えていく責任があるのかもしれない。

参照

- 1 Tomohiro Shitara "Restoration Project for Gunda Gundo Monastery" Keio University, 2005.
- 2 設楽知弘・三宅理一・米倉立子・出佳奈子、「グンダ・グンド修道院の成立と空間特質に関する論考」『日本建築学会大会学術講演梗概集（東海）』、2003年
- 3 Robert Beylot "Estifanos, hétérodoxe éthiopien du XVe siècle", *Revue de l'histoire des religions*, 1981 No.198-3 pp. 279-284.
- 4 Robert Beylot "Actes des Pères et Frères de Debra Garzen : introduction et instructions spirituelles et théologiques d'Estifanos", *Annales d'Ethiopie*, 1990 Vol.15 pp. 7-43.

（あおしま けいた／芝浦工業大学工学部）